

---

# X-RACING Grand Prix

怜lay

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

X-RACING Grand Prix

### 【Zコード】

N1451B

### 【作者名】

怜1ay

### 【あらすじ】

機械の街、エンポリウム。この街で、大々的なレーシングイベントが開かれこととなつた。各地から集められた精銳（？）たちが、凌ぎを削つて縦横無尽に駆け巡る！

プロローグ～略奪と秘密～（前書き）

レースシーンは余りなさそうですが、

## プロローグ～略奪と秘密～

プロローグ 略奪と秘密と

闇がある。

ただ、深い闇が、そこには横たわっている。

”X-Grand Prix”開催予定地として建設されたドーム、後に”エンポリウム・スタジアム”と名を変えるドームには、今はまだ名はなかつた。

入り口前に掲げられた看板には黒と白のチェック柄 ゴールフラッグを模したものを背景に「X-Grand Prix」の文字が躍つていた。

下には小さく「Light Industry」とロゴがあるのも見て取れる。

ここは約二週間後に控えたX-グランプリの開催地。機械の街”工  
ンポリウム”のほぼ中心に位置している。

そこには、ただ闇だけが支配していた。

と。

ブゥウ・・・ン

機械が起動する音が静寂を突き破る。

そして、闇夜の一点に煌々と照らされ、ドームの一 角が浮かび上  
がつた。

そこには一台の高速巡回車両がアイドリング状態で停車していた。

否、それは展示されていた。

X-OX-Hックスクの名を持つ、L/Iの粹を集めて作られた最新鋭のXマシン。

どこからか、女性の声が闇にこだまする。

「メイン・システム起動・システム・オールクリーン・サブ・システム・レディ」

それは、どうやらエックスクから発せられているようだ。

ヘッドライトが灯され、動力機関が唸りを上げて回転速度を上げていぐ。

かといって、誰かが乗っているという訳でもなさそうである。では一体だれが？

「X-OX-Hックスク・コンディション・オール・グリーン・全システムをアイドリングへ移行」

徐々に起動音が落ち着いていく。

最後には、ピピッ、という電子的な音を残して、ドームはまた静寂の闇へと包まれた。

ザツ　　、と。

誰かが地を踏む足音。その足音を隠そうともせず、闇夜を移動する何か。

「

X-OX-Hックスクに搭載された機械知性体>L-I-O-Kは、システムをアイドリングのまま待機させ、表層意識だけを浮かべて外の様子を探つた。

(センサに熱反応を確認・身長・体重により男性と判断します)

複合センサが捉えたのは一つの影。長身のホソリした男だった。男は足音を隠すこともせず、物影に隠れることもなく、堂々と、正面から歩いて接近しているようだ。

> 止まりなさい・人を呼びますよ・<

レ・ヨの声に、男は何の素振りも見せず、黙々と接近してくる。

> これは警告です・止まりなさい・<

男は止まらない。ついにエックスの前までくると、男はようやく立ち止まつた。

> あなたは何者ですか? リトの関係者には見えませんが? <

「それに答える義務はない」

厳肅な男の声。ヘッドライトに照らされた顔は、上半分を覆うフードによつて誰とは判別できなかつた。

開発関係者リストとの一致もない。まさに真っ赤な他人であつた。男はそれだけを言つと、ドライバーシートに近づき、扉に手を掛けた。

> 何が目的ですか? 私の奪取ですか? それとも、この質問にも答えは得られないのでしょうか? <

今のレ・ヨに、この男に逆らつ術はなかつた。ドライブイング・システムはリトが掌握しているため、レ・ヨの意思でエックスは動かない。

男はどんな魔法か、ロツクされていたはずの扉を開け、エックスに乗り込んだ。

「その質問には答えよう、せめてもの労いだ。 答えはYESだ。

君を、ある人物の元へ送り届ける」

男はエックスのシステム系統をチエックしながら答えた。

レ・ヨによつてアイドリング状態にされていたシステムが再び起動する。

男は唇に笑みらしきものを浮かべると、一度エックスを降り、土台とのジョイント部分を外した。

> ある人物とは何者ですか? <

再び男が乗り込んだとき、レ・ヨは男に尋ねた。

こうなつては、もう男の成すがままとなるしかなかつた。エックスのシステムはレ・ヨよりもドライバーを優先するよう出来ている。

「Lioには Lioだけでは、エクスは動かせない。

「それは会つてからのお楽しみだ」

そう言って男は口元に確かな笑みを浮かべ、Lioの主電源を落とした。

そのとき、何故かLioは、不思議なほどの安心感を得ていた。それはこの男に対するものだったのか、今となつてはもう分からぬ。

## プロローグ～略奪と秘密～（後書き）

派手に物語の裏側を出してみましたが、どうぞよろしく。

## 第一話～依頼と命令と、強制登録

夜が明ける。過ぎない風のないよつて、明けない夜もまた、ない。

「ゴウン　！」

「うわーっ！」

耳元で鳴り響いた轟音に、ジンは一気に覚醒した。  
何事かと辺りを見回す。そして、隣の部屋の機関室の音だと思い当たつた。

「ヤバ、もうこんな時間だ！完全に寝坊してるー！」

ジンは掛けてあつた毛布を払いのけ、大急ぎで支度を始めた。  
ベットの向かいにあるクローゼットに手を伸ばし、両扉を勢いよく開ける。

特に悩むこともなく、油汚れにまみれた一張羅を取り出して身に付ける。

クローゼットの横に立てかけてある姿見をチラッと見て、前後が間違つてないことを確認する。

ベッドの下に手を突っ込んで軍手を取り出し、パンパンと軽く払つて両手に嵌める。

その間も「ヤバい、ヤバい」を連呼しつつ、である。

「よしぃー！」

一つ氣合を入れると、勢いよく部屋から飛び出していく。

轟音を響かせる機関室の前を通り過ぎ、上り階段を一段飛ばしで駆け上がる。

ここはエンポリウムの機械屋へクルドメカニックへ。

店はまだ開店前だが、店の横にはカバーの降りた一台の車輛らしきものが止まっている。

機械の街へエンポリウムへの朝は騒々しい。

クルドメカニックも例外ではなく、今日も騒音が店内から響いている。

「すいません、寝坊しました！」

「おう、起きたかジン！早速で悪いが、炉の調子が悪いみてえなんだ！見ててくれるか！」

「はい！」

地下から突き上げる重低音や店内に響く甲高い駆動音に負けないようになると、大声を張り上げる一人の男。

一つはまだ若干幼さを残した顔立ちの青年の声。油にまみれ、黒染みの目立つ一張羅を着込み、手には軍手を嵌めている。

もう一人は壯年の凄みの聞いた男の声。黒のタンクトップを着て、頭にはタオルを巻いている。

朝の挨拶もそこそこに、ジンはクルドに言われた通り、店の外にある炉を見に行く。

「よつ・・・・と」

正面シャッターを押し開け、差し込む陽光に目を細める。たてがみのように広がった髪は、朝日を浴びて銀色に輝いた。

青年ことジン＝アサハは、JUNCHONPOLYUMではちょっと名の知れた青年だ。

というのも、ジンが住み込みで働くクルドメカニック店長クルド＝F・チャンバーは、機械の街と呼ばれるエンポリウムにおいて、右に出るものはないと言われるほどの腕の立つ技術士だからだ。ジンが有名になるのも無理はない。

何故ならこのクルドという男、頑固一徹で通っているのだ。弟子を取つた、という話は、クルドを知っている者なら、誰もがまず自分の耳を疑い、次にその話をした者の頭を疑うことだらう。

ジンは突き抜けるような蒼天を仰ぎ、朝の空氣を肺に取り込む。

「ふう・・・・今日もいい天気だ」

「おう、何か言つたか！？」

「いえ、別に」

背後からクルドの声がして、振り向ひ、「途中でジンは動きを止めた。

脇に止まつてゐる車輛が眼に止まつた。

「なんだ・・・？」

その周りだけ、なんとなく違和感を覚える。

「おやじさん！これは！？」

「ああ！？ああ、そりや何だうつな！今朝起きたらもう止まつてた

んだ！」

「客ですかね！？」

「分かんねえな！依頼なら開店前になんてこねえだろ！？」

それもそうか。ジンは小さくつぶやいた。

「それより、炉の方はどうだ！？」

「あ、はい！今見ます！」

客のものではないとすれば、誰かが置いていつただけなのだろうか。気にはなつたが、ひとまずその車輛のことは忘れ、炉を見に行く。何のことはない、薪が切れていただけだつた。

ジンは店の裏手に回ると、薪を一抱え持つて炉に放り込んだ。

「あちちつ！」

途端に火力が上がり、炎が噴出す。

ジンは急いで飛びのき、ついでに炉の扉を蹴り閉めた。

「おやじさん！どうシスかー！？」

「おお、いい感じいい感じ！サンキュー！？」

「よしよし」

ジンは頷くと、正面口から中へ戻つた。ついでに、脇にある郵便受けを確認し、中身を取り出すことも忘れない。

「えーっと、いつもの新聞とこれは、手紙・・・？」

新聞を作業台の上に置き、一通の封筒を手に取り、見比べる。

一つはレノエから街への通達。もう一つは差出人はなく、「ジン＝

アサハ様」という宛名だけが書かれたものだ。

「おやじさん！はい今日の新聞！」

「おう！そこ置いとけ！」

クルドに新聞を渡し、まずはL／Iの手紙から封を切る。

「X-GrandPrize 開催！」

まずそんな見出しが大きく書かれている。

「Lの度、わが社では新たに開発した重力制御装置・Gravit yControl System、略称>GCS<公開の場を設けることに相成りました！

現在建設中のドームを利用した一大イベントです！エンボリウムに住まう方々も、そうじやない方も、ドンドン参加しちゃってください！

参加条件は一切ありません！誰でも参加が可能なので是非是非！参加してみてください！

詳しい日程などは後日、改めて通知いたします！質問・相談はL／I本社受付センターまで！」

とまあ、内容はこうだ。なんとも明るい文面だが、内容はかなり大事である。

「重力制御・・・？」

なんとも現実味のない言葉だ。重力を制御する、といひことは空で飛ぶのだろうか？

確かに、L／Iは空を飛ぶ新しい技術を最近開発中だ、という話を聞いたことがある。

だが、少なくともあと三年は掛かる、と言つていたのではなかつたか？

予定が早まつたのか、何らかの偶然に偶然が重なつたのか。

「まあ何にしろ、発展するのはいいことだらうけど」

L／Iの通達から目を逸らし、作業台に置いておいたもう一通の手紙に視線を移す。

「これは・・・差出人がない、か。何だらうな・・・」

消印もないところを見ると、郵便局を通さず直接ポストに投函されたものらしい。

軽く振つてみると、かさかさと、何かが紙と擦れ合う音がした。

「開けてみるか」

作業台からパテを取り、封の隙間に差し入れ、切り開く。

中から出でたのは、手紙と、

「これは、鍵、だよな・・・」

何の飾り気もない、単一な鍵。プレート部分にはXという刻印が彫られている。

扉の鍵とも、金庫の鍵とも取れる形状。何の鍵なのか、せっぱり見当がつかない。

鍵を作業台に置き、まず手紙を読むことにする。内容はこうつだ。

「ジン＝アサハ様へ

突然のお手紙、お許しいただきたい。

訳あつて名は明かせぬが、貴方に折り入つて頼みがある。この度J/Eが開かれるグランプリの通知は既に届いていることと思う。

貴方には、そのグランプリに出場して貰いたい。

マシンは既に手配させてもらった。クルドメカニックの脇に止まっているものだ。鍵はこの手紙と同封する。

ロールアウトしたばかりのものだ、調整・改良はクルド＝J・チエンバーに任せて貰つて構わない。

マシンについてはリオに尋ねるといい。私の愛しい娘だ。

突然のことでの誠に申し訳ないと思うが、既に出場登録は済ませてある。

あまりにも一方的だつた。

「・・・・は？」

ジンは思う。何だこれは。

手紙と鍵を何度も見比べる。やはり訳が分からぬ。

まず、何故自分なのか。そして、手紙の主は何者なのか。

理解が追いつかない。ますます混乱する。

「 だーッ！なんなんだ～ッ！！」

分からぬ。分からぬ。分からぬ。

よし、ここは一つ深呼吸して落ち着こう。

「すう～・・・・・はあ～・・・・・」

うん、大分落ち着いた。それじゃあ、最初から順番に理解していく。

まず、手紙の主は訳ありで名は明かせず、折り入ってジンに頼みがあるといつ。

そして、その頼み事というのが、レノエの主催するグランプリに出場してほしい、というものだ。

マシンは既に手配されており、現在店の脇に止まっている。鍵は手元にある。

そのマシンはロールアウトしたばかりの新型で、調整やなんかは klubdに一任する、とある。

・・・こじまでは、なんとか理解していけてい。

続きを読む。

そのマシンについては、リオという人物に尋ねればいいらしい。その子は手紙の主の愛娘であるようだ。

そして、ジンの是非にかかわりなく、出場登録は既に済ませているらしい。

ここだ。何故既に出場登録が済んでいるのか。

大体、マシンはレノエから配給されるのではないのか。・・・といふことは、これはレノエからの正式な依頼、といふことか？  
いや、レノエならば堂々と名乗るはずだ。わざわざ隠す必要はない。  
では、一体何処からなのか。手紙の主は一体どんな人物で、どんな思惑でこんなことをしているのか。

「・・・だめだ、さっぱり分からん」

とにかく、手紙のことをクルドに話さなければならない。

手紙にクルドの名が出ている以上、無関係ではないからだ。

「おやじさん！ちょっとといいか！？」

「おう！なんだ！？」

店の奥から返事が届く。クルドの仕事場は店の奥にある。大型車輛の修理をする場合を想定して、かなりの広さを持つている。その作業場から、クルドが手拭いながらやってきた。

「で、なんだ？」

「この手紙なんだけどさ」

手紙をクルドに差し出す。

一通り目を通したあと、クルドは言った。

「何だこりゃ？」

期せずしてジンと同じ第一声であった。

「えーと・・・ふむふむ・・・・。つまりここにいつとか？準備ははじめで済ましてあるから、グランプリに出してくれってことだろ？」

「？」

「多分」

「随分と自分勝手な言い草だな。その上名乗つもじやしねえ。ビリにも怪しいな」

一方的な、これは命令だった。依頼料がもらえるところわけでもなさそうだ。

「こういう依頼だったら、普通ルビーの方に行けばまだなんだ。でも、これは俺宛に名指しでご指名ときてる」

「確かに、あの向でも屋なりこりこりのはうつつけだな」

ルビー ルビー・ウルフはエンポリウムで何でも屋を営む元盗賊の名だ。

ジンはよくその仕事の手伝いに借つ出される。といっても、武器や巡回車輛の手入れが主な仕事だが。

そのルビーを差し置いて自分に依頼がくることに、ジンは不思議でならなかつた。

「は～ん・・・といあえずよ、このコオつて嬢ちりやんに会えば何か

分かるんじゃねえか？」

「ああ、俺もそう思つたんだ。けど、知り合いにリオなんて奴はないし……」

まさか。ジンは嫌な予感がした。  
もしかしたら、そのリオって子は外に止めてあるマシンの中に居るのかもしねえ。

いくらカバーを掛けたとはいえ、いや、掛けたあるからこそ、マシンの中に長時間居るのは危険だ。

「　おい

「ああ、分かつてる！」

クルドも同じことを考えていたのだろう。ジンは額ぐと、鍵を手に外へと走り出た。

店の脇に入り、マシンのカバーを外す。ガラスは全てスマートガラスで、中の様子を窺うことはできない。

「チツ！」

ジンは舌打ちする。このわき道はかなり細く、ドアを開けることが不可能だったからだ。

「おやじさん！」

クルドが飛び出していく。二人でマシンの後ろに回り、力いっぱい押す。幸いギアは入つていなかつたようで、すんなりと前へ進んだ。

「ジン！ハンドルを！」

「了解！」

わき道を出たところでクルドから指示が飛ぶ。  
右側の扉を鍵で開け、中を覗き込む。

「・・・あれ？」

「どうした！？誰かいたか！？」

「いや、それが　誰もいないんだけど」「はあ？」

とりあえずそのままマシンを押し、店内に運び入れる。

「で、どうなつてんだ？」

「さあ・・・」

リオはいなかつた。車内には誰も乗つていなかつたのだ。  
では、リオというのは誰のことなのだろうか。

ジンはドライバーシートに座り、内装をチェックする。

「どうやら本格的なレーシングマシンみたいだな・・・」

タコメーターと燃料モニタの他に、タイヤの消費度を映すパラメータが見えた。

更に、マシンの丁度真ん中にコンソールがあり、「Sleeping」という文字が左右に流れていた。

「A・I・・・?」

エンポリウムでは、A・I・搭載型車輌は、そう珍しくない。

操縦・調整・整備・補修など、様々な仕事をA・I・機械知性体に任せるのが、現在では基本となつていて。

そのため、マシンの整備は任せてしまつてよくなるが、変わりにA・I・の整備が必要になる。

もちろん、自己診断機能は付いているが、それだけでは気付かないものもある。

もしかして、手紙にある「リオ」というのは、このA・I・のことを示すのかもしない。

ジンはキーを差込み、捻つた。

ピ　ツ

> Good Morning <

コンソールに光が灯る。次いでエンジンに火が入り、低い咆哮を上げた。

「うわ」

見た目より音は低く静かで、レーシングマシンといつよりはスポーツカーミたいだ、とジンは思った。

> Aria Search . . . <

と、しばらくコンソールに流れ、周辺の大まかな地図が表示された。

地図にはリアルタイムで情報が書き込まれていき、車輌では抜けられない脇道や、現在は使われていない橋などが削除されていく。

地図が左下へ縮小され、コンソールには女性の顔が大写しになる。

「君が・・・？」

彼女が、リオ、なのだろうか。

女性が眼を開く。人ではありえない銀色の瞳。機械知性体の証だつた。

ジンと彼女の視線が絡み合つ。

「君は・・・」

> 搭乗者の認証を行います・指紋認証を行いますので・ハンドルを握つてください・<

「・・・あー」

どうしたものか、とクルドに目をやる。

クルドはニヤリとした笑顔で、頷いた。やつちまえ、といふことだらう。

「・・・・・えーっと」

ジンは頭をポリポリと搔きながらリオに向き直る。

> 搭乗者の認証を行います・指紋認証を行いますので・ハンドルを握つてください・<

「よし」

ジンはハンドルを握　　ろうとして、自分が軍手を付け放しだつたことに気付き、慌てて外し、改めてハンドルを握つた。

> 指紋を取得中・・・データバンクにアクセス・・・ジン＝アサハ様と確認・マスターに設定します・<

「これでよかつたのかな・・・」

今更、後悔が押し寄せせる。

「今更何言つてやがる。やつちまつたモンは仕方ねえぞ。これだけの高性能だ、変更くらい簡単に出来るさ」

「そうなの?」

クルドの言葉が本当なのか、リオに尋ねる。

「私のマスターはジン＝アサハ様のみです。変更・再登録は認められません。」

「……」

「……あー。ま、しゃあねえわな」

しゃあねえ、で済ませられる問題だらうか！？

「……はあ」

こうなることは薄々勘付いてはいた。いたが、避けられない宿命といつものある、ということだ。

「それで、君は……君が、リオなのか？」

「YES・私の名はLio・OPTF-00^ゼロ^のナビゲーションA-Iです。」

Lio・リオ。やはり手紙に書いてある「リオ」とは彼女のことだつたようだ。

それにも、ゼロ、とは……。

「ゼロって……？」

「ん？ どつかで見たなあ……えーっと、何だったかなあ」

クルドは懸命に思い出そうとするが、出てこないようだ。仕事の事以外にはとんと関心がないクルドのこと、しばらく時間が掛かりそうだ。

そういうえば、確かにどこかで見た名前だ。OPTF-00……ゼロ……。

つい最近、そう、今朝方だ。今朝見たものはLioからの通知と謎の手紙、それから……。

「それって、今朝の新聞じゃない？」

「おう、それだ！ 確か……」

クルドは作業台においてあつた新聞を手に取り、バサッと広げた。

「ほら、ここだ」

一つの記事を指し示す。「搜索願」の欄だった。

「なになに……」「ロールアウトしたばかりの新型Xマシン、OP

TF-00<sup>ハ</sup>ゼロ<sup>ハ</sup>が何者かに奪取された疑いがあります。心当たりのある方はレノエ本社まで・・・って、レノエ！？」

「ああ。何だ、やつかいなモン拾つちまつたなあ、ジン」  
「これは・・・どうしたらいいんだ？あー・・・ちょっと整理しよう。」

まず、このマシンはレノエから何者かに奪取された。  
次に、あの手紙と共にジンの元へ来た。ということは・・・。

「あの手紙の主が奪取した、ってこと？」

「多分、そだらうな。名前が明かせないワケってのはそれだらう」ということは、ジンたちはその何者かに加担した、と取られてもおかしくないところじだ。

OPTF-00<sup>ハ</sup>おそらく極秘で進められたプロジェクトの完成体なのだろ？

だから、レノエも公にすることができない。

いつ奪取されたのかは分からぬが、おそらくはつい最近、一週間以内と考えて間違いない。

さすがに一週間以上も経てば大々的に公表されるはずだ。レノエの長はそれほど馬鹿じやない。

「このこと、レノエに伝えたほうがいいよね」

「ああ。もし強盗で見つかることになつたら俺たちが犯人にされちまう」

「だよね・・・」

「マスター、よろしいですか？

「ん、何？」

「その」ノエ<sup>ハ</sup>こののは、リト・インダストリーのことでしょうか？

「そうだよ。知らなかつた？」

「YES・リト」というのはリト= S・ファスターのことですか？

「ああ。」ノエ<sup>ハ</sup>の社長をやつてる

## 第一話～依頼と命令と、強制登録（後書き）

こうして主人公・ジン＝アサハはX-RACINGに出場する運びとなつたわけで。

他のエントリー・シートはいずれ埋まるでしょう。  
終わり際に出てきたリト＝S・ファスターとは、一体どういった人物なのでしょうね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1451b/>

---

X-RACING Grand Prix

2010年10月13日17時37分発行